

那珂市の八幡太郎義家伝説

那珂市歴史民俗資料館

今から九百年余り前の八幡太郎義家の奥州征伐に関する伝説的史跡は、県内各地に存在している。水戸市渡里町の「長者屋敷跡」、そこから北上して藤井町の「十万原」、ここは義家の軍勢が陣を敷いた所。

那珂市域においてもかなりの数に上る。戸の龍昌院の西方にある「戸板の渡し」は義家が那珂川を渡る時に「戸板」を並べて渡った場所であるという。東の台地へ進むと飯田の「曲松」は義家が休息した時のお手植えの松と伝えられ長い間親しまれてきたが、今は枯死してない。鴻巣を過ぎ瓜連方面へ向かうと地名に「木戸前」があり木戸氏の館跡もある。義家が出陣の折りの館所といわれ木戸を設けた場所と伝えられる。この東方白河内地内に「五万木平」といわれる平地が広がっている。義家が五万騎の軍勢を休息させた所という。さらに東方、南酒出字宮の台に「駒形神社」(本殿は市指定文化財)がある。義家が戦勝を祈願して田地を寄進したという。本殿三面は安永10年(1781)石岡の彫師嶋村伊三郎の浮彫彫刻で囲まれている。その内の二面が義家関係であるが、昭和20年(1945)の敗戦後、軍国調であるとのことから一部が削り取られたことは惜しまれる。

「菅谷」に在った両宮の一つ八幡宮は戦勝の御礼として義家が勧請したと伝えられる。また、八幡宮は土地に自生していた菅(ちがや)を葺いて造られた建屋だったので菅谷という地名が起ったという。駒形神社北方の門部地区には「駒の膝」説話がある。義家が断崖急坂にさしかかった時、自分の馬の健脚を試そうと駆け上がらせたと、不幸にも力尽き倒れてしまったという。義家はこの馬を付近の谷津川に捨てたが、土地の人々が馬の遺骨を引き上げ駒形神社に祀ったともいわれる。この年、義家は馬が死んだ凶年として越年のための小屋を造った所が「小屋場」である。この地域では義家の小屋より豪華な瓦葺きの屋根にするとその家は滅びるとの言い伝えがあった。門部地区に伝わる「門部ひょっとこ踊り」は義家軍を慰労するために始められたものという。



(鞍掛石)

字小屋場の谷津川に沿った丘陵上にある「鞍掛石」は僅かに露出していて鞍の形に似ている。義家が鞍を馬からはずしてこの石に掛け休息したところ、後日その石が鞍に似てしまったという。昭和30年(1955)12月、地元「綿引」姓一同によって建てられた碑がある。堰場地区には「楯石」という巨大な石が露出していた。義家が小屋場に陣所を構えた時、巨石を楯にして矢を放ったことから名付けられたという。

瓜連鹿島の久慈川流域を一望できる「化粧坂」は義家が家来たちと清水をぬぐって化粧したという。また、義家が休息している時に里人が献上物を差し上げた所という「献上坂」がなまり「けじょうざか」になったともいわれている。

同所の久慈川渡しの付近の字を「八幡瀬」という。義家が浅瀬を選んで対岸の小島へ渡ったという。「大塚不動尊」には、突然飛びかかった犬が義家に斬られ、その後犬が石に変わったと伝えられ、傷のある石が祀られている。

この地域からは少し離れるが、静神社の東隣りの桂木稻荷神社の境内には巨大な老木「ムクノキ」がある。義家が戦勝を祈願した際、持参した鞭を地上に挿したものが根付いたものといわれている。国道118号線の下大賀から大宮へ向かう「武具取り坂」は、後三年の役を終えて凱旋の途次、安心して武装を解き休息した所という。



(ムクノキ)

これら多くの伝説や史跡から、地域の人々の八幡太郎義家への思いが伝わってきます。